漱石文学の思想

第二部

自己本位の文学

今西順吉

筑摩書房

漱石文学の思想

第二部

自己本位の文学

今西順吉

筑摩書房

今西順吉（いまにし　じゅんきち）

1935年，東京都に生まれる。
1957年，東京大学文学部印度哲学梵文学科を卒業。
東京大学大学院修士課程・博士課程を経て，1964年～1966年，西ドイツ・ゲッチンゲン大学留学。
現在　北海道大学教授。
著書・論文
「マーダヴァ『全哲学綱要』の一考察――第14章『サーンキヤ哲学』の文献学的研究――」（『古代学』12-2），「初期中観派におけるサーンキヤ思想1＆2」（『北海道大学文学部紀要』14-2；18-1），「ヨーガ学派の心作用論」（『印度学仏教学研究』32-2），Abhidharmatexte in Sanskrit aus den Turfanfunden I & II (Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen),「鷗外とアショーカ王研究」（『仏教の歴史的展開に見る諸形態』創文社），「アショーカ王研究」（『大乗仏教から密教へ』春秋社），「我と無我」（『印度哲学仏教学』1），「言語世界の構造とその破壊――『中論』の言語哲学について」（『印度哲学仏教学』2），「『中論』の原典について」（『仏教思想史論集』成田山仏教研究所），その他多数。

漱石文学の思想　第二部

1992 年 1 月 10 日　初版第 1 刷発行

著　者　今西順吉
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社 筑摩書房

111　東京都台東区蔵前2の6の4
電話　東京(5687)2680(営業)
東京(5687)2670(編集)
振替　東京6―4123
印刷・株式会社 厚徳社
製本・矢嶋製本株式会社

© 1992 Junkichi Imanishi

ISBN4-480-82302-6　C1095　Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが，小社読者係宛にご送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

第二部　目　次

第三章　自己本位の文学
はじめに　11
一　「マクベスの幽霊に就て」　16
二　「琴のそら音」　23
三　「倫敦塔」　37
四　「カーライル博物館」　47
五　「幻影の盾」　53
六　「薤露行」
1　問題の所在　67
2　三人の女性　68
七　「趣味の遺伝」

1 戦争の多面性 86
2 戦争批判とその思想的根拠 92
3 父母未生以前 100
八 『漾虚集』が提起するもの
——作品における「自己本位」の構図—— 106
九 『吾輩は猫である』の思想構造
1 これまでの『猫』論 128
2 検討の方法 136
3 語り手としての猫 138
4 第一章の特性 141
5 実業家批判 149
6 死の意識 152
7 内的世界と外的世界 155
8 銭湯の場面の意味 162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9　逆上の両義性と漱石の二世界説　168
10　現実世界の相対性　188
11　最終章　191
12　漱石文学における『猫』の位置　197
十　『坊っちゃん』
1　問題の所在　217
2　作品としての位置づけ
——『猫』における「逆上」との関係　223
3　「清の墓」の問題　226
4　『坊っちゃん』から『草枕』へ　228
十一　『草枕』
1　はじめに　234
2　『草枕』の骨子　242
3　自然と意識　246

4　意識論　265
5　能「長良の乙女」　272
6　山里から現実へ　288
7　『草枕』とサーンキヤ哲学　295
［付論　『夢十夜』第六夜］　316
8　漱石とサーンキヤ哲学との関係　318
9　むすび　325
十二　『草枕』に対する漱石の自己批判の意味　341
十三　『野分』
1　自己と他者　349
2　文学者の孤独　357
3　自己の確立　360
4　むすび　369
十四　『虞美人草』

1 はじめに 375
2 構成 ――『ハムレット』と「虞美人」の故事―― 376
3 主題 392
4 死と愛 403
5 「見る」ということ 413
6 自然と悲劇 424
十五 『坑夫』の無性格論の意義
1 問題の所在 440
2 無性格論 440
3 無性格論と漱石 447
4 無性格論と自己 450
十六 『三四郎』
1 三四郎という青年 460
2 三つの世界の意味 463

3 火宅の影 470
4 池畔の情景の再現と光の意味 479
5 美禰子の内面 ――「霊の疲れ」 483
6 火宅 490
7 美禰子と三四郎の関係 495
8 「森の女」 500
9 「われは我が愆を知る」 505
10 選科生与次郎 516
十七 『それから』
1 はじめに 535
2 二世界構造 537
3 天爵と自己本位 545
4 判断中止 ――代助の人物像―― 550
5 物語的表層としての「恋譲り」と

思想上の「判断中止」 556
6 不安の構造 567
7 炎 577
8 漱石自身の問題 584
十八 『門』
1 初期の三部作 610
2 宗助夫婦の「幸福」 611
3 内部の空洞 614
4 「丸い円」 622
あとがき 633

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

漱石文学の思想

第二部　自己本位の文学

第三章　自己本位の文学

はじめに

ここで「自己本位の文学」と呼ぶのは帰朝から修善寺の大患にいたるまでの諸作品である。「自己本位」の思想内容については第一部において詳しく述べたが、本章（第二部）ではそれがこの時期の作品の上に実際にどのように表現されているかを検討することにしたい。

ところで、「自己本位の文学」が修善寺の大患までであるとするのは、大患によって漱石のそれまでの思想、すなわち「自己本位」の立場が崩壊し、この思想上の挫折の結果としてそれ以後に新たな思想的模索がなされ、それに応じて漱石の文学もまた大患以後は本質的に変化した、という理解に基づいている。

漱石に思想の崩壊があり、「則天去私」の唱道が「自己本位」の思想の崩壊に根拠を持つということはこれまでに指摘されたことがなかった。[1] しかしこのように考えなければ大患以後の諸作品は理解が不可能であると思う。修善寺の大患は漱石の思想の上に重大な意味をもっており、その結果として大患以前と以後では作品の本質ががらりと変わっているのである。そして『明暗』もまたこの問題をめぐるものであって、未完に終わったこの作品の意義は以上の立場からはじめ

『則天去私』を唱えた時のそれと、大差なかったと思われます。[3]」と『則天去私』の意義は承認しているようである。「しかし漱石はその作品や、『則天去私』の哲学より一廻り大きい存在である。彼の作品には謎はないが、作者自身には謎がある。[4]」『道草』について「公生活を除いた親類間の身辺雑事を、淡々たる自然主義的筆致で綴ったもので、一部からは漱石の最高の傑作といわれているものである。しかし自然主義的私小説との差は自ら明らかである。漱石はここでも決して裸になってはいない。[5]」「幻影の盾」について、「盾の中の世界に至福な世界があるとはあまりにも荒唐無稽で、この部分は多分漱石の創作です。しかし彼は真剣だったので、愛の成就について、全集第十三巻『日記及断片』一二三頁に記載があります。[6]」このように、大岡氏が漱石の思想に言及する視点は定まっていない。大岡氏は漱石の「真剣さ」を認めながら、氏の眼から見て「荒唐無稽」なるが故にこれを安易に無視する。「荒唐無稽」であったとしても、漱石が「真剣だった」のであるならば、漱石研究の立場からは漱石の記述を重視すべきであろう。「荒唐無稽」という評価は外界の認識に照らした上での判断であろうが、漱石は内部世界を重視した人であり、越智治雄氏を初めとしてそのことを承認する研究者は少なくない。従ってそれが如何なる内的世界の表出であるかを見極めることなしに、独断的に判断を下すべきではないであろう。

さて、漱石の思想という場合には、講演であるとか、あるいは小説の中の文明批評的な部分を取り上げて論じるのが通例である。そしてその場合に「思想」というものをかなり抽象化されたものとして考えやすい。従って漱石がその小説において実際には思想を表現しようとしたのであるということの意味を理解しようとしない向きがないとは言えない。しかしながら漱石が自己の

存在そのものにおいて思想を捉えようとしていたことは、本書第一部に述べたところからも明らかであると思う。

漱石を狭く「文明批評家」と限定するならば、漱石自身は文学が自己の「本領」であると信じていたのであるから、文明批評家という視点だけからその文学を把握するのは不十分であることは明白であろう。むしろより広い意味において、文学は漱石にとって思想の表現でなければならなかった。だから漱石において、思想は小説と本来不可分であったに違いない。

このような作家の思想を考察するには、講演や評論などの限られた資料だけを取り上げて論ずることで済ますわけにはいかないであろう。むしろ当面の課題に必要な限りの論拠を、講演・評論はもとより、すべての作品の中から摘出して示さねばならないであろう。ところがここに大きな問題が存在する。それは漱石作品そのものをどのように理解するかが漱石研究者の間においても確定してはいないという事実である。この点は本書第一部の序説で詳しく述べた通りである。従って個々の作品についてその中核に思想があることを明らかにして、わたくし自身の作品理解を明確にしなければならないであろう。

われわれはまず最初に本章において『門』までの諸作品がどのように「自己本位」の思想を描いているかを検討し、次いで第三部の第四章において『思ひ出す事など』が思想の崩壊を描くものであることを証明し、そして第五章において『彼岸過迄』以後の諸作品が漱石自身の思想的立ち直りのための模索の試みであることを明らかにし、以上の検討を踏まえて最後に『明暗』を考察することにしたい。われわれは以上の考察によって、「則天去私」の問題の所在、ならびにその思想としての意義をほぼ厳密に解明することが可能となると考える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com